

学研労協 NEWS ニュース

12.8 不戦のつどい開催

つくば地区で12月8日の「開戦記念日」にちなんで毎年開催されている「12.8 不戦のつどい」は12月5日（日）松代交流センター会議室で開催されました。今回は戦争の紙芝居「茂木貞夫物語」の上演をメインに、対面で開催することができました。

上演されたのは、広島で小学6年生の時被爆した茂木貞夫さんの体験をもとにした紙芝居「茂木貞夫物語」です。この紙芝居は茨城大紙芝居研究会の学生たちが戦争体験者からの聞き取りをもとに作った紙芝居の一つです。学生たち自身が紙芝居を上演することができなくなったあと、水戸市在住の朗読家、見澤淑恵さんが、これらの紙芝居を引継ぎ上演するためのグループ「オリーブ」を立ち上げて上演活動をつづけているそうです。「茂木貞夫物語」の上演したあと、モデルになった茂木貞夫さんがご自身の体験について語りました。



1945年8月6日、茂木さんは友達と一緒に登校する途中で原爆に遭い、やけどを負いました。隣にいた友人は爆風で吹き飛ばされ、その後会うことはなかったそうです。紙芝居は、そのときのことやその後の、臨時に作られた救護所で手当を受けていたつらい日々、療養のため転居した茨城での暮らしの描写を通じて、戦争を絶対にやってはいけないというメッセージを伝えるものです。

紙芝居上演の後、紙芝居の中では、ただ優しく看護してくれたと描かれた茂木さんお母さんも実は、原爆で近くにあった茶筆筒のガラスが割れて、その破片が背中に多数刺さり終戦後もずっと痛い思いをしていた等のエピソードを茂木さんが紹介しました。

参加申し込みが多いときや希望があるときはZoomを利用し配信するとアナウンスしましたが、結果的には会場の定員に見合う28人の参加者で、面前で本物の紙芝居上演を見ることがになりました。